

平成30年3月31日(土)

老球の細道402号

3月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ここ数年3月を迎えると東日本大震災を思い出させられる。今年も7年目を迎えた。戦争を経験しない私にとっては、今までの人生で最高のパニックになった。しかも、かつて原町、相馬に10年住んでいたのも、もしかしたら私や家族も犠牲者になっていたかもしれない。原発事故は授業の中で冗談で話していたのが現実になった。「自分の命は自分で守る」「想定外のことは起こりえる」。改めて、震災で学んだことを思い出した。

1・読書から

◆「幕府と会津藩が開国を成し遂げたおかげで日本は欧米の植民地にならず、独立を保ち、近代化の礎が築かれ、明治以降の発展が可能になった」(『会津人群像』歴史春秋社)

会津では「戊申150年」、山口県では「維新150年」というそうだ。それぞれの歴史観によって立つ位置が変わるのはしかたがない。会津は歴史の中で何度も全国レベルの戦いに関与していることをふまえ、会津人は「ならぬことはならせる」矜持を持ちたい。

2・新聞のコラム等から

◆「賢者は、自分がつねに愚者に成り果てる寸前であることを肝に銘じている(オルテガ・イ・ガセット)」(朝日・折々のことば)

ちょっと慣れてくるとぬるま湯の中で安住してしまう。常に自分の外にあるもの、自分の想像を超えるものに注意を向けていなければ現状維持のマンネリ地獄に陥ってしまう。

◆「子どもたちよ、子ども時代をしっかりと楽しんでください。大人になってから、老人になってから、あなたを支えてくれるのは、子ども時代の“あなた”です」(朝日・福岡伸一の動的平衡)

子どもは成熟しないかわりに、遊びの中で学び、試し、気づく。これが脳を鍛え、知恵を育むと生物学者は説く。私の子ども時代は朝から夕方まで遊びに始まり、遊びに終わった。その後はバスケットが遊びに代わる。今もあの頃の私で毎日楽しく生きている。

◆「可能性を信じられなくなったら、もうそこで競技者としておしまい。自分はずっとできると思う」(朝日・高梨沙羅・W杯通算55勝)

コーチも選手の可能性を信じられなくなったらお終い。選手はもっと上手になると信じ切ることが選手のやる気を刺激する。そして選手は成長する。ピグマリオン効果である。

◆「壁なんて超えるためにある。道がなければ、作るまで」(サッカー選手・三浦知良・FCTテレビ『成功の遺伝子』より)

日々の努力は今までの自分を越えるためにある。立ちほだかる壁の向こうには何があるのか、壁登りは面白い。自分にミラクルを起こすためには刺激的で魅力ある日々が必要だ。「未知」への挑戦の後に新しい道ができる。

◆「お客様は来て下さらないもの。客が来ることじたいが奇跡。ラーメンを作らせてもらう。頭が下がり、誠心誠意作らせてもらう」(ラーメンのカリスマ・飯田将太)

色々な講習会をやってきたが、来てほしい選手、コーチは参加しないものである。当然である。名も実績もない私の講習会に参加してくれる人の方が希少である。参加してくれた人が1人でも「来て良かった」と喜んでくれるよう新年度もがんばろう。